

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19974

研究課題名（和文）イェルムスレウ言語論からみた20世紀後半フランス思想の研究

研究課題名（英文）A Study of French Thought in the Latter Half of 20th Century from the Perspective of Hjelmslev's Linguistic Theory

研究代表者

平田 公威（HIRATA, Kimitake）

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：50962255

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、デンマーク人言語学者ルイ・イェルムスレウの言語論に照らして、20世紀後半のフランス思想を体系的に研究することであった。本研究では最終的に、イェルムスレウ言語論の「媒入」概念を試金石にすることで、バルト、デリダ、ドゥルーズとガタリの思想的特徴が測れることを示した。媒入は、何を言語と認めるのかという、学問的な境界確定にかかわる概念であるが、この概念のうちに、伝統的な言語学的前提を認めて限界点を指摘するのか、それとも非言語学な外への開かれを認めるかが、フランス思想の分水嶺であったということを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果にしたがえば、20世紀後半のフランス思想は、ポスト・ソシュールの言語学の精緻な読解と、それを前提にした思想的戦略の多様性によって特徴づけることができる。それゆえ、ドゥルーズらの思想は、一概に「ポスト構造主義」として消極的な仕方では整理されるものではなく、一定の問題意識と取り組みを共有するものである。このように、本研究は、20世紀後半フランス思想における言語学の重要性を再提示し、そのもとのドゥルーズらの思想を提示しなおした点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study systematically investigated the French thought in the latter half of the 20th century through the linguistic theory of Danish linguist Louis Hjelmslev. The research demonstrated that it is possible to measure the philosophical characteristics of R. Barthes, J. Derrida and G. Deleuze & F. Guattari using Hjelmslev's concept of "catalyse" as a touchstone. This concept relates to the scholarly delineation of what is recognized as language. The study revealed that the watershed of French thought lay in whether to this concept one acknowledged the traditional implicit premises of linguistics and their limitations or recognized an openness to non-linguistic elements.

研究分野：二十世紀フランス思想

キーワード：ルイ・イェルムスレウ 二十世紀後半フランス思想 構造言語学 構造主義 記号論 ロラン・バルト
ジャック・デリダ ドゥルーズ&ガタリ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

広く知られるとおり、20世紀フランスでは、フェルディナン・ド・ソシュール(1857-1913)に端を発する構造言語学が大きな思想的影響力をもち、構造主義と呼ばれる思潮が形成されており、この事実により、これまでの多くの研究者が関心を寄せてきた。しかしながら、その一方で、ソシュールを批判的に継承したデンマーク人言語学者のルイ・イエームスレウ(1899-1965)が参照軸となっており、1960年代後半から1980年代にかけてのフランスの思想が展開されたという事実は十分に研究されてこなかった。構造主義の隆盛以降、フランスの哲学者らは、ポスト・ソシュールの言語学者を参照することで、自らの思想を展開していったのである。興味深いのは、そのイエームスレウ受容が一様ではなく、構造主義思想に対する態度を反映するかたちで、大きく三つの傾向に分けられるということである。すなわち、(1)イエームスレウを構造主義的に解釈して援用するもの(ロラン・バルトら)、(2)イエームスレウを構造主義的に解釈して批判対象にするもの(ジャック・デリダら)、(3)イエームスレウを非構造主義的に解釈して新たな思想的源泉とするもの(フェリックス・ガタリとジル・ドゥルーズ)である。こうした思想史的事実に即してみれば、イエームスレウ言語論受容は、多様な展開を遂げた20世紀後半フランス思想にとっての分水嶺であり、その究明は重要な課題のひとつであると言えるにもかかわらず、ほとんど手付かずのままにされてきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イエームスレウ言語論受容に着目して、20世紀後半からのフランス思想の展開がどのような内実と意義をもっていたのかを明らかにすることである。より具体的には、上述した三つのイエームスレウ言語論受容について研究することで、当時のフランス思想界において共有されていた問題意識と、その問題に対する三者三様の取り組みを明らかにすることであり、ひいては、20世紀後半フランス思想を体系的かつ包括的に展望する視座を提示することである。

3. 研究の方法

本研究では、文献研究を主な方法とし、その成果を体系的かつ包括的なものにするために、次のステップを踏まえる。まず前提として、イエームスレウ言語論についての基礎的な研究を行う。その際、当時のフランス言語学界における構造主義的な動向と、イエームスレウに対する評価も精査して、イエームスレウ言語論の特徴を浮き彫りにする。ついで、その成果を踏まえて、上述した三つの立場に割り当てられる哲学者のテキストを精読する。より具体的には、哲学者らのイエームスレウ読解の妥当性と独創性を評価しつつ、イエームスレウの言語論のどこから、どのような思想的な意義が引き出されているのかを検討し、その成果に照らして、それぞれの哲学の内実と意義を解明する。

4. 研究成果

以上の目的と方法のもとで研究を行い、2022年度と2023年度に、それぞれ次の研究成果を得た。

まず、2022年度には、イエームスレウ言語論についての基礎的な研究を進め、その言語論がソシュールを祖とする構造言語学に対してもっていた特徴が「内在主義」として定式化できることを明らかにし、そのうち、構造主義的に受容されていった側面と、ポスト構造主義的に受容されていった側面を検討した。

この研究成果の要点は以下の通りである。(A-1) イエームスレウの言語論は、たとえば『言語理論の基礎づけについて』(1943年、竹内考次による邦訳タイトルは『言語理論の確立をめぐる』)の表題からも明らかなように、言語データをもとに何を「言語」として記述すべきかを体系的に理論化したものであり、その基本的な発想は、同一性ではなく差異を、実質ではなく形式を言語学上の記述対象にしたソシュールにならうものである。(A-2) このように、イエームスレウの言語論は、ソシュールに忠実である点で構造主義的と形容されるものであるのだが、一切の実質を捨象して、音韻論的な弁別特徴をも言語形式の記述としては不十分と主張する点で、当時のフランス言語学の大家アンドレ・マルティネのような構造主義的な音韻論者とは対立している。(A-3) つまり、イエームスレウの言語論は、構造主義の着想を推し進め、徹底して言語を追究するものであるが、その帰結は、従来の言語観を離れていってしまうのであり、この両面性が、ときに構造言語学の完成者として構造主義的なものとして受容され、ときに構造言語学を超えるポテンシャルをもつ非構造主義的なものとして受容されていったと考えられる。

以上の研究成果については、「イェルムスレウとフランス現代思想」(2023年3月、共催：日仏哲学会、開催形式：オンライン)と題したシンポジウムを開催して報告した。またこのシンポジウムでは、イェルムスレウを構造主義的に解釈したうえで批判的に受容したデリダを専門とする研究者と、非構造主義的に解釈して肯定的に受容したガタリを専門とする研究者を一名ずつ登壇者に擁立して、登壇者間でイェルムスレウの思想的意義について情報交換と議論を行い、二十世紀フランス思想におけるイェルムスレウ言語論の重要性を広く示した。

つぎに、2023年度には、イェルムスレウ言語論についての基礎研究を継続しつつ、2022年度の研究成果も踏まえて、イェルムスレウを構造主義的に受容しながら批判した哲学者デリダの『グラマトロジーについて』(1967)と、非構造主義的に受容して積極的に援用した哲学者ドゥルーズとガタリの『アンチ・オイディプス』(1972)についての研究を進めて、この対照的な評価が何を争点にしていたのかを明らかにし、イェルムスレウ言語論の思想的意義を解明した。

この研究成果の要点は以下の通りである。(B-1)2022年度の研究成果(A-3)で明らかになった通り、イェルムスレウ言語論は、言語学が言語として何を記述するのかを問題にしている。つまり、イェルムスレウ言語論は、言語学という学問の境界画定に関わっているのであり、この点をめぐって、デリダと、ドゥルーズとガタリは対照的な評価を与えている。

(B-2)デリダは、イェルムスレウによってソシュールの差異の言語学が推し進められている点は高く評価しつつも、言語学という学を可能にする当の差異そのものがどのように与えられるのかが不問にされている点を批判し、この問いに答える仕方、自らの思想を形成している。(B-3)ドゥルーズとガタリもまた、イェルムスレウによってソシュールの差異の言語学が推し進められている点を高く評価しているのだが、デリダとは異なり、イェルムスレウ言語学の内在主義的な分析手続きを、「分裂分析」という自らの思想的な試みに資するものとみなしている。(B-4)このデリダと、ドゥルーズとガタリの対照的な評価は、イェルムスレウ言語論の観点からみれば「媒入」(catalyse)という概念、言語学の境界の(再)画定にかんする操作をめぐるものであると考えることができる。

以上の研究成果については、日仏哲学会の機関誌『フランス哲学・思想研究』の投稿論文にまとめて報告している。また、イェルムスレウ言語論から多くの着想を得ているドゥルーズとガタリの思想については、その包括的かつ体系的な研究成果を、2023年に水声社より出版した単著で報告している。これらに加えて、継続的に行ってきたイェルムスレウ言語論そのものにかんする研究成果として、2023年度に行ったシンポジウムでの発表原稿をもとにした論考を水声社のweb雑誌に寄稿したほか、イェルムスレウの論文集である *Nouveaux essais* (1985)の訳書『新言語学試論』を水声社より2024年に刊行した。

以上のように、本研究では、イェルムスレウ言語論の特徴を整理しつつ、その思想的な影響力に着目して20世紀後半のフランス思想の内実と意義を明らかにし、複数の成果物を通じて、比較的マイナーであるイェルムスレウ言語論が哲学思想研究における重要な問題のひとつであることを広く示した。これにより、今後の20世紀後半フランス思想研究において、言語学の思想的意義の再検討が広くなされていくことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 平田公威	4. 巻 39
2. 論文標題 何を言語と認めるか：イェルムスレウ言語素論の内在主義について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 コメット通信	6. 最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平田公威	4. 巻 29
2. 論文標題 デリダとドゥルーズ=ガタリのイェルムスレウ言語論受容について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平田公威
2. 発表標題 イェルムスレウの内在主義について 言語の分析から総合へ
3. 学会等名 イェルムスレウとフランス現代思想
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 平田公威	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 320
3. 書名 『ドゥルーズ=ガタリと私たち：言語表現と生成変化の哲学』	

1. 著者名 平田公威	4. 発行年 2024年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 262
3. 書名 ルイ・イェルムスレウ 『新言語学試論』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関